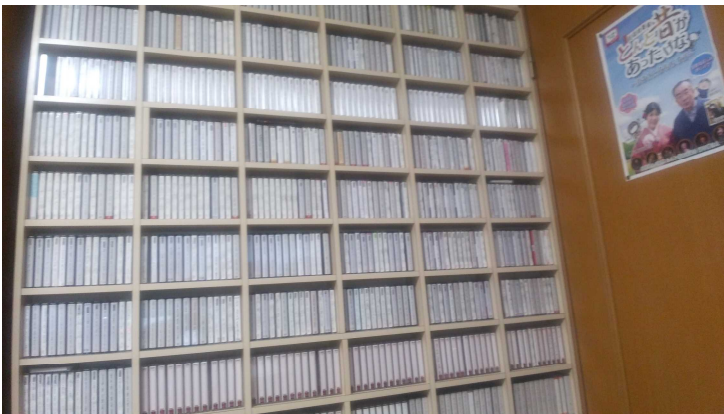


## 「QRコードで聴く島根のわらべ歌」作成で

酒井 董美ただよし

昨年末に引いた大風邪も、どうやら治まった。大好物の雑煮にありつけたのも、昨日十三日の昼食である。平素、健康を自認していても、今回のことでいささか自信を喪失したことは否めない。残念ながら高齢のしからしむるところなのであろう。さて。オミクロン株が猛威をふるっている世の中であり、島根でも昨日は一日としてはこれまでで最高の百一名の感染者を出したと、マスコミは報じている。

さて、筆者にとって、外出を控えながら行えることと言えば、発表の当てはないながら、「QRコードで聴く島根のわらべ歌」のホームページ登載作業をすることである。これは前にも書いたが、九十曲（出雲、石見、隠岐各地区三十曲）を取りあえず、一曲ずつカセットにダビングすることである。そして掲載した紙面のQRコードを開けば、歌い手の声が聞こえることになる。



筆者の書斎の壁に作ったカセットテープ置き場

半世紀以上も前から収録してきた録音資料は約一万点。中から選んだ曲を探してダビングして行く。筆者のことであるから、その気になれば作業は難しくない。

結局三日ばかりかかってこの作業は終了した。収録当時の録音を聴きながらの作業は懐かしい。今は故人になってしまわれた方々とのやり取りが瑞々しく再現する。

古いところでは、現在の江津市桜江町川越で、昭和三十五年八月一日に収録した、慶応四年（一八六四）生まれの原田トメさんの土筆つくしを摘むときの歌「彼岸坊主はどこの子、スギナのかかあのオト息子」などがあり、当時二十五歳で口承文芸を収録し始めたばかりの、筆者と原田トメさんとの活発なやり取りも残されている。

一事が万事、九十曲収録当時の一人一人の歌い手の方々との出会いと、収録に至った経緯が、まるで昨日の出来事のように甦ってくるから不思議であり、言い知れぬ懐かしさが彷彿ほうふとしてくる。

筆者はこれまでの曲をカセットにダビングしながら、これらは先祖の人々の子孫に残したメッセージの詰まったもので、形はないけれども無形民俗文化座であることを、しみじみ思わざるを得ないのである。長年研究を続けてきた者としては、これらの文化財を多くの人々に知ってもらい、無形民俗文化財としての意味合いを理解してもらおうよう努めなければならぬと改めて決意し直したところである。

幸い文章としての原稿も完成した。毎週一回の新聞連載を前提に考えれば、二年近く続けることになる。連載に理解を示す新聞社はないものか、これから行動を起こそうと考えている筆者なのである。（元島根大学法文学部教授）